

文豪たちの厚き友情

―片岡鐵兵と川端康成―

先般、津山市在住の岸信子さんから、生涯学習課へ一編の詩が書かれた書が寄贈されました。この書は原稿用紙を三枚貼り合わせてつなげ、その上に墨で「海と大空の中の一瞬のわたしを孤独と思へ」と書かれています。この文章は現在ベスタロツチ館前にある片岡鐵兵の胸像の台座に書かれている文章です。

片岡鐵兵は明治二十七年（一八九四）、芳野村寺元（現在の鏡野町寺元）に生まれた文学者で、二十代後半より上京して作家となり、横光利一の川端康成らと同人雑誌「文芸時代」の創刊に携わり活躍、「綱の上の少女」「綾里村快拳録」をはじめ数多くの作品を残しましたが、昭和十九年（一九四四）病のため五十歳で亡く

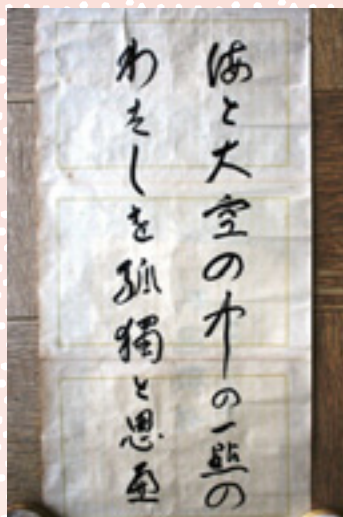


写真1 寄贈された川端康成の書

なりました。

昭和二十五年（一九五〇）、芳野村が郷土の文学者を顕彰するために「鐵兵文庫」と胸像制作を計画し、鐵兵と親交があった村内在住の定包弘吉氏が東京の鐵兵の知人らで結成される「鐵兵会」に書籍や制作費の寄贈をよびかけ、実現しました。

胸像の制作は同じく芳野村出身の彫刻家・坂手讓氏が手がけ、台座の碑文は鐵兵の親友であった川端康成が揮毫し、翌二十六年十月十八日芳野公民館にて除幕式が挙行されました。

川端康成は、今さら言うまでもありませんが、「伊豆の踊子」「雪国」など多くの文学作品を著し、日本人



写真2 碑の除幕式の記念撮影
左から2番目が川端康成

初となるノーベル文学賞を受賞した日本を代表する文学者です。鐵兵と康成は共に講演旅行や湯治などに出かけするなど深い親交があり、鐵兵の葬儀では康成が菊池寛の弔辞を代読しています。鐵兵の死後康成が『新文学』に寄稿した「片岡鐵兵の死」というエッセイには鐵兵の家族も含めた親交の深さと、その死の悲しみがよく伝わってきます。

こうした経緯から、康成が台座の揮毫を引き受けたものと思われます。除幕式には鐵兵の妻・光枝さんと康成、同じく作家の立野信之が東京から出席しました。康成は、その挨拶で鐵兵が友情に厚い人柄であったこと、美しいものや真実に対する強いあこがれを常に持っていたことなどを約二〇分にわたって話し、最後は「この銅像が壊されて弾丸になるようなことがないように」と締められたそうです。

さて、冒頭で述べた書は、筆跡も字の大きさも碑文と同じで、写真ではわかりませんがよく見ると上に別の紙を置いて文字を写し取ったとみられる凹みを確認されますので、これは碑文のために康成が書いたものとみて間違いのないでしょう。当時の広報紙『報道苦西』によると、康成は碑文の揮毫にあたり、鐵兵の好んだ文を



写真3 片岡鐵兵文学記念室
町立図書館内にあります。

四つ書き、そのうちから選定されたようです。この書は岸さんの亡くなったご主人が所蔵していたもののようですが、入手した経緯は不明のようで、残りの三つの所在もわかりません。

碑文の下書きとはいえ、原稿用紙を貼り合わせた紙で揮毫しているのは文豪・川端康成らしく、多忙の中で、親友のために自宅にあった有り合わせの原稿用紙で揮毫したという背景が想像できそうです。

参考資料：『片岡鐵兵資料集』、『報道苦西』、片岡鉄兵文学記念室
協力：力・井上幹彦

お問い合わせ先
生涯学習課 日下
電話（0868）54-7733